

「介護付有料老人ホーム 百ねん庵 楠・桜」
リハビリテーション 事例簡易報告

理学療法士 春日井美代 鈴木あかり
作業療法士 木村 靖紀 曾我真奈加
言語聴覚士 坂野 智子 廣野英美
マッサージ師 小川浩司

リハビリ事例集

療養マッサージによる事例

①

T・N様(女性 85歳)

左大腿骨骨折の骨折歴があり、マッサージ開始前は左股関節から下肢にかけての安静時痛、歩行痛が強くなり、痛みを誘発すると思われる個所に揉捏(拇指でもみほぐす)や持続圧を続けるうちに、痛みを感じる時間が少しずつ減少し、リハビリやレクリエーションにも積極的に参加されるようになった。「楽にさせていただいて、皆さんに感謝です」と笑顔が増えた。



I・C様(女性 74歳)

慢性的な腰痛があり、腰から下肢にかけての施術により、痛みなく過ごせる時間が多くなってきた。また頭痛でベッドから起き上がるのもつらいとおっしゃる日もあるが、頸肩部を中心としたマッサージをすると痛みが和らぎ、気分も良くなるとのこと。「気持ち良くて楽になり、ありがとうございます。」と楽しそうにおっしゃられる。



Y・I様（男性 86 歳）

腰・膝に痛みあり。痛みの緩和、体力アップのためにリハビリ介入。介入当初は腰痛のため運動意欲も低く居室に閉じこもりだったが、腰のストレッチ、体幹・下肢の筋力増強訓練（キッキング、SLR による下肢挙上、Hip-up）を図ることで痛みは緩和してきた。現在は屋外歩行可能となり隣の施設まで歩かれ、低周波・ホットパックを施工しに行かれる。リハビリにより活動量が増え、笑顔も多く見られるようになってきた。



I・R様（男性 79 歳）

H25.6.2 居室にて転倒され大腿骨を骨折された方です。元々、パーキンソン病であり歩行は不安定。術後2週間で施設に戻られリハビリ開始。介入直後は術創部の痛みの緩和を図りながら筋力増強訓練を行った。杖での見守り歩行が可能となり Time Up and Go（転倒リスク評価）を行う。8月の初回検査と現在を比較すると約3秒時間が短縮しており、転倒リスクが徐々に軽減してきている。引き続き身体機能の向上を目指す。

8月 22.40 秒 → 9月 21.03 秒 → 10月 20.09 秒



I・M様(硬膜下血腫、白内障)(女性 88歳)

H25.8.2 からリハビリ開始。入居当初は、起き上がりに見守りが必要。立位は、後方重心がみられバランスが悪く、座る際も勢いよく座られる為見守りが必要。座位では後方に倒れていく事が多くみられる為、軽介助～見守りレベル。独歩での歩行では、歩幅が狭くスピードが遅くふらつきがみられる為軽介助レベル。シルバーカー歩行では、上手く真っ直ぐ歩けず、見守りが必要。BBS(転倒の評価)56点満点中26点(8月8日実施)、約1.5ヶ月程筋力向上訓練、バランス訓練、棒体操等のリハビリと、自主訓練を行った結果、バランス能力(座位・立位共に)向上。起き上がり・立位から座位・端座位で自立レベルに向上する。歩行バランスも向上してきている。BBS56点中41点(9月5日実施)に向上。歩行バランスが良くなる。BBS56点中44点(10月14日実施)に向上。日常生活で行えることが多くなり、本人様も喜んでいる姿が見られる。



I・R様(脳梗塞後遺症、大うつ病性障害、高血圧)(男性 77歳)

H25.5.2～当施設にてリハビリを開始。入居当初は、起居動作(寝返り～立ち上がり)は見守り・自立レベル。寝返りは、体を回す事がしにくい感じが見られた。立ち上がりでも、ふらつきがみられ、座る際は、勢いよく座られていた。歩行は、独歩はスピードが遅く刻み足、シルバーカーは、スピードが早く前のめりぎみになっていた。ベッドの高さ等の環境調節を行い、本人様の状態にあわせ、リハビリの訓練(筋力強化訓練、歩行訓練、バランス訓練等)を行う。BBS(転倒評価)H25.5.26 29点 H25.7.8 43点 H25.8.19 43点 H25.9.24 44点と初めに比べ、点数が向上。現在は、歩行スピードも安定し、バランスも向上してきており、安定した歩行が可能。



病気や事故、加齢などで言語や嚥下(飲み込み)機能に問題が生じた方々に対し、コミュニケーション能力や、摂食嚥下機能の改善をお手伝いし、自分らしい生活ができるよう支援する。

次のような症状に対し、言語療法・摂食機能療法を行う。

1. 失語症事例 K・M様(男性 89歳)

話が理解できない、言いたいことばが出てこない方とコミュニケーションを図る。

脳梗塞のため、始めはほとんどお話されることがなかったが、今では、食堂で顔を合わせると自分から話しかけたり、ジェスチャーで意思を伝えようとされることが増えた。訓練では、絵カードの名前を言ったり、得意な歌を一緒に歌う練習をしている。



2. 構音障害事例 I・S様(女性 85歳)

ことばが出しにくい、はっきり話せない方への指導を行う。

お話をする時、小声になり、ことばが途切れてしまう。毎回、大好きな本を大きな声で読み、内容について一緒にお話しすることを楽しみにされている。



3. 嚥下障害事例① Y・Y様(女性 64歳)

うまく噛めない、飲み込めない方へ安全に食べられる援助を行う。

入院されていた時から、胃瘻により流動食を入れていらっしゃる方だったが、少しずつ口から食べる量が増え、今では食堂で昼食を食べられるようになった。スタッフの協力で、食事の介助を続けている。



嚥下障害事例② T・A様(女性 85歳)

痛みがあるため、食欲がないものの、いつも「おいしい」と頑張って食べていただく。安全に食べていただけるよう、食事介助させていただく。

